

馬高遺跡

—史跡「馬高・三十稻場遺跡」環境整備事業に伴う試掘調査概報—

2000

長岡市教育委員会

I 遺跡の環境と調査に至る経緯

遺跡の環境 馬高遺跡は、新潟県長岡市の中央部を流れる信濃川の左岸段丘（関原面）上に立地する（図1）。「馬高」は当地域の俗称地名で、現行の所在地名は長岡市関原町1丁目字中原である。遺跡地は標高約60mの平坦な畑地で、その西側には小規模な沢（通称「遠藤沢」）を隔てて三十稻場遺跡が位置する。信濃川左岸沿いの段丘上には、縄文時代に営まれた大小の遺跡が多数分布している。中期の馬高遺跡・後期の三十稻場遺跡のほか、大規模な集落跡として深沢町の岩野原遺跡（中・後期）や西津町の藤橋遺跡（晚期、国指定史跡）があり、当地域における中心的な集落であったと考えられる。

調査に至る経緯 馬高遺跡の発見は古く、地元では明治のころから石器が多数採集される場所として知られていた。特に関原町の豪農家である近藤家では、勘治郎・篤三郎父子が昭和10年代に発掘調査を行い、膨大な資料を蓄積した。この近藤家資料は戦後、科学博物館の中村孝三郎によって整理・研究が行われ〔中村1958〕、馬高遺跡は「火焔土器」発祥の地として全国的に著名になっていった。昭和47年（1970）には、周辺で開発事業が進展する状況に対応して、馬高と隣接する三十稻場の全城に及ぶボーリング及び分布調査が実施され、大規模な集落跡であることが明らかになった。その成果もあって、昭和54年（1979）には両遺跡のほぼ全城が国史跡に指定された。指定面積は三十稻場と合わせて45,704.54m²に及ぶ（図2）。また平成2年（1990）には、近藤篤三郎によって発見された「火焔土器」が国重要文化財に指定されている。

現在、長岡市教育委員会では、馬高・三十稻場遺跡環境整備事業を進めており、平成9年度に史跡指定範囲の公有化を完了し、隣接地の発掘調査〔前川1999〕等を行っている。また平成11年から市民代表や学識経験者からなる保存整備検討委員会を発足させた。今後、保存や整備を具体化させるためには遺跡の実態を明確にしておくことが必要があるが、これまでの調査では多数の遺物は得られているものの、遺跡中心部を対象にした本格的な発掘調査は行われておらず、集落の構造や造構の内容に不明な部分が多く残されている。このような情勢を踏まえ、長岡市教育委員会（担当：科学博物館）では、馬高遺跡の史跡指定地全城の様相を把握し、保存整備に向けた基礎資料を収集するため、試掘調査を実施することにした。

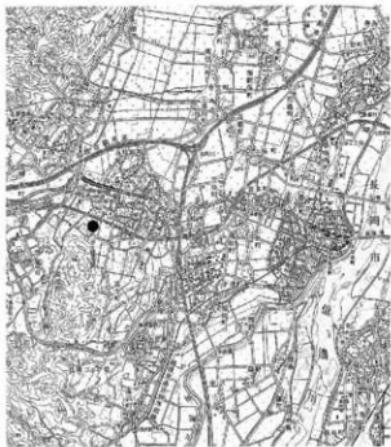


図1. 馬高遺跡の位置 (1/100,000)



写真1. 遺跡の景観（遺跡中央部付近）



図2. 史跡「馬高・三十稻場遺跡」指定範囲(1/1,500)

II 調査の方法と経過

試掘調査は1999年9月24日から11月12日までの期間（実質34日間）に実施した。まず調査に先立ち、馬高遺跡の史跡指定地全域（25,465.54m²）を対象にグリッド測量を行っている。指定地の南西に基点を設け、全域に20mメッシュの大グリッドを設定、その各交点に基準杭を打設した。南北ラインは真北に合わせた。大グリッドの座標名称は南北A～K、東西I～XIとした（図3）。また大グリッドの中を2×2mの小グリッドに区分し、南西コーナーを基点として南北a～j、東西1～10とした。標高単点測量のベンチマークは既存のKBM（H=61.520m）を使用した。グリッド測量の後、9月24日に必要な機材を搬入、東西10×南北4mを基本形とする発掘溝（トレント）を設定し、27日から発掘作業を開始した。トレントは総計35か所（1～35T）で、指定地内全体に10～20m間隔で配置した。ただし、3・22Tは地形や植生の制約でトレントの範囲を縮小、23TはA・Bに分割、また13・18Tは遺構の状況により部分的に拡張している。

発掘作業はほぼトレントの番号順で、概ね南側から北側へ進めた（写真2・3）。各トレントについては、人力で地表面まで掘り下げ、堆積土層、遺構の有無、遺物の出土状況などを確認した。原則として遺構内部の発掘は行わず、プランの検出にとどめた。また、出土遺物は2×2mの小グリッド及び遺構単位で取り上げ、層位等を記録している。測量・写真撮影等の記録後には、順次埋め戻し作業（写真4）を行った。11月11日には全トレントの埋め戻し作業を完了し、12日に機材を撤収して調査を終了した。

なお、調査前には、(株)NTT-MEの依頼を受けて、指定地中央部分を対象に地中レーダー探査を実施している。また調査期間中には、「馬高・三十塙場遺跡保存整備検討委員会」の見学会（10月15日）、市民参加による「縄文遺跡を訪ねる会」（10月30日、写真5）を開催し、発掘の途中経過を報告した。



写真2. 発掘作業状況 (18T)



写真3. 発掘作業状況 (34T)



写真4. 埋め戻し作業状況 (23BT)



写真5. 「縄文遺跡を訪ねる会」(24T)

III 調査の結果

(1) 調査区の概要と確認された遺構

設定したトレンチ(図3)のうち、22Tを除いて何らかの遺構を検出した(表1)。確認された遺構には、整穴住居跡・炉跡・焼土・土坑・ピット・埋設土器などがある。土坑とピットについて、概ね径1m以上のものを土坑、それ以下のものをピットとして便宜的に区分している。主なトレンチの状況は写真6～13と図5に示した。なお、28・29Tの北半部及び30Tの東半部は著しい削平を受けていた。

層序 土層の堆積は、遺跡中央(18・24T)と東端(21・27T)付近で厚く、その他は概して薄い状況であった。堆積が安定し、比較的良好な遺存状況のトレンチ(27T例)にみられる層位は、次のとおりである。

I層：褐色土(色調：Hue7.5YR4/1～4/2)、表土(耕作土)、しまりなし、層厚約20～25cm。現耕作土のI1層と旧耕作土のI2層に細分される。II層：暗褐色土(Hue7.5YR3/1～3/2)、遺物包含、地山粒・炭化粒少量、粘性ややあり、層厚約15～20cm。II2層：黒褐色土(Hue7.5YR3/1～2/2)、遺物包含、地山粒・炭化粒少量、しまりなし、層厚約25～30cm。III層：褐色～黄褐色土(Hue7.5YR5/2～5/3)、漸移層、地山粒多量、粘性ややあり、層厚約5～10cm。IV層：黄褐色土(Hue7.5YR5/4)、地山、粘性あり。



図3. トレンチの設定位置図(1/2,000)

表1. 確認遺構一覧

レンチ名	地山深度	遺構(推定基数)	レンチ名	地山深度	遺構(推定基数)
1 T	18~22cm	土坑(4), ピット(15), 捨立柱状ピット(1)	19 T	40~52cm	土坑(1), ピット(6)
2 T	19~21	土坑(1), ピット(6)	20 T	18~30	土坑(1), ピット(1)
3 T	21~50	土坑(1), 混状遺構(1), ピット(1)	21 T	47~68	燒土(1), ピット(5)
4 T	19~100	炉跡(2), フラスコ状土坑?(1), ピット(13)	22 T	20~32	なし
			23 A T	24~43	土坑(1), ピット(3)
5 T	19~26	土坑(3), ピット(2)	23 B T	24~47	焼上(1), 埋設土器(1), ピット(3)
6 T	24~33	炉跡(1), 土坑(2), ピット(3)	24 T	49~63	住居跡?(1=濃・ピット5), 住居跡?(1=炉跡1・焼上・廻), 土坑(3), 貯(1), ピット(10)
7 T	36~46	土坑(3), ピット(2)			
8 T	31~37	土坑(1), ピット(1)	25 T	13~20	土坑(4), ピット(10)
9 T	21~33	燒土(1), 土坑(3), ピット(5)	26 T	23~40	土坑?(1)
10 T	28~37	埋設土器(1), 土坑(1), ピット(20)	27 T	22~38	燒土(3), 土坑(2), ピット(8)
11 T	36~45	土坑(4), ピット(13), 捨立柱状ピット(3)	28 T	13~20	ピット(3) *トレチ北半1.2削平
12 T	39~44	埋設土器(2), 集石?(1), ピット(4)	29 T	70~75	燒土(6), 貯床狀(1), 土坑(4), 烧?(1), ピット(30) *トレチ北半1.3削平
13 T	25~28	住居跡(1=炉跡1・ピット5・貼床1), 土坑(3), ピット(5)	30 T	26~46	ピット?(1) *トレチ西半2.3削平
14 T	14~16	燒上(6), 濃(3), 土坑(2), ピット(16)	31 T	22~76	ピット?(2)
15 T	31~64	埋設土器(1), ピット?(2)	32 T	18~45	住居跡?(1=燒土4・貼床3・濃2・ピット3), 廉土(4), 貯床狀(2), ピット(14)
16 T	27~40	土坑(2)	33 T	18~20	土坑(1), ピット(6)
17 T	36~54	土坑(1), ピット(2)	34 T	48~116+	燒土土坑?(1)
18 T	51~73	住居跡?(1=黒色落込), 集石遺構(4), 焼土(1), ピット(18)	35 T	25~38	土坑?(1), ピット(3)

遺物はⅡ1～Ⅱ2層の境界付近から多量に出土した(写真12)。Ⅱ2層下部の出土遺物は少なく、遺構のかかる部分ではⅡ1層下部から掘り込まれている状況から、Ⅱ1層下部～Ⅱ2層上部付近が遺跡の旧表土に相当するとみられる。層厚の薄いトレチでは、Ⅱ2層は残存せず、またⅡ層自体が消失している場合もある。なお、18・24TではⅡ2層の下にⅡ3層(黒褐色土で地山粒・炭化粒を多く含む、遺構覆土の可能性あり)が、21・27TではⅡ1～Ⅱ2層間でレンズ状に堆積する広範な焼土部分(遺物を含む)が認められた。

住居跡・炉跡・焼土 4・6・13・14・18・24・29・32の各トレチで住居跡の痕跡が確認された。

遺跡南部の4Tには炉跡2基があり、南端中央の炉は石組が壊れているが梵鐘形の複式炉とみられる。また南東隅からは土器埋設炉が検出された。炉の形態から、前者は中期後葉に、後者は中期終末～後期初頭に位置づけられる。4Tの東側に位置する6Tには、石組炉1基が検出された。幅約30cmの楕円形状で、全体の1/3程度を検出した。遺跡中央部寄りの13Tでは、円形の竪穴住居跡1基の約半分を確認している。直径は推定5mで、主柱は8本構成とみられる。周壁は残存していないが、主柱穴を繋ぐように広がる円形状の貼床が認められた。炉は床炉で、長さ180・幅80cmの長楕円形状に浅く掘りこぼめられ、その底面は焼成によって著しく硬化していた。炉の北東からは床面直上で半完形の火焔型土器(写真9)が出土していることから、中期中葉の古段階に構築されたものと考えられる。その東側に接する14Tでも、地床炉とみられる焼土や周溝が複数検出され、13Tと同様の住居跡が複数重複している可能性が高い。周溝の状況からは長方形ないしは長楕円形状の住居跡が想定される。

遺跡中央部の18Tでは、北側の拡張部分に半円弧状の黒色土の落ち込み(深さ約20cm)が広がり、比較的大形の竪穴住居跡の一部とみられる。またその上部や周囲には4か所の集石遺構が検出されている(写真10)。18Tの北側に位置する24Tでは、竪穴住居跡とみられる部分が2か所ある。南西隅には周溝が半円弧状に巡っていた。一方、北東隅には焼土(地床炉?)の広がりや楕円形の石組炉(長さ約110cm)1基があり、竪穴住居跡が複数重複した状況が推測される(写真11)。また周溝に沿った地山ブロックの盛り上がりが部分的に認められ、周堤状の遺構の可能性もある。

遺跡北部の29Tには地床炉とみられる焼土が点在し、貼床状の広がりも認められた。竪穴住居跡が複数重複した状況であろう。さらに北側の32Tには、半円弧状の溝に囲まれた中に焼土や貼床状の部分が検出

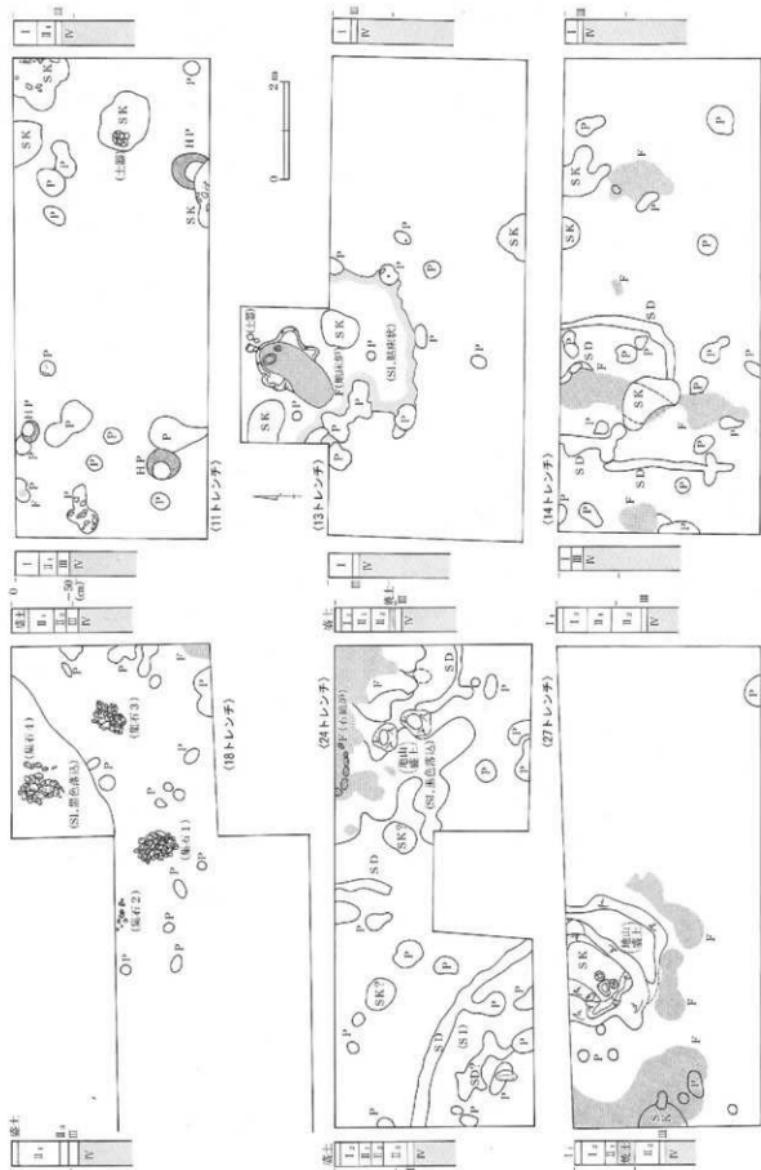


図4. 主要トレンチの平面図及び土層柱状図 (平面図: 1/100, 土層柱状図: 1/40, SI: 住居跡, F: 焚土
・炉跡, SD: 溝, SK: 土坑, P: ピット, HP: 握立柱状ピット)



写真6. 土坑検出状況 (11T)



写真7. 柱穴検出状況 (11T)



写真8. 埋設土器検出状況 (12T)



写真9. 炉跡検出状況 (13T)



写真10. 住居跡・集石遺構検出状況 (18T)



写真11. 住居跡・炉跡等検出状況 (24T)



写真12. 遺物出土状況 (27T上層部)



写真13. 土坑等検出状況 (27T下層部)

され、堅穴住居跡の一部と考えられる。その他、焼土や貼床状の部分があり、重複した状況を呈している。

土坑・ピット・埋設土器 22Tを除く各トレンチから土坑やピットが検出された。先の住居跡検出のトレンチのほか1・10・11Tなどに多い。4Tの西端の斜面部には、フ拉斯コ状とみられる土坑が1基あり、底径2m・深さ50cmを測る。11Tには長さ120・幅100・深さ50cmの楕円形状の土坑があり、覆土上面の西側に土器1個体（縄文施文のみ）が置かれていた状況（写真6）から、墓坑の可能性が高い。27Tの土坑は不整形で長さ2.5m以上・深さ70cmを測り、東側に周堤状の地山ブロックの盛り上がりが検出された（写真13）。その他、比較的大形な掘り形で柱痕と埋土部分が明瞭に区別できるピット（掘立柱状ピット）が1Tと11Tで確認されている。深さはいずれも50cm以上で、掘立柱建物跡の柱穴と考えられる（写真7）。

埋設土器（炉以外のいわゆる埋焼）には、10・15・23BT各1基、12T2基の計5基がある。地山に埋設した10Tを除いて包含層中で検出（写真8）。23BTは大木8b式古段階の土器（写真16）が逆位で出土した。その他は縄文のみの施文である。なお、10Tの土器は縄文の特徴から中期終末の所産とみられる。

（2）出土した遺物

すべてのトレンチから遺物が出土した（表2）。その総数は、縄文土器30,697点、石器・石製品212点、土製品30点を数える。トレンチ別の集計では、27Tが最も多く、18T・24Tがそれに次ぐ。その他、1,000点以上出土したのは34・32・29・21・15・12Tであり、いずれも遺跡中央部から北側にかけてのトレンチである。その大半は遺物包含層であるI～II層から出土したが、特に27Tでは土器個体が投げ込まれたような密集した状況であった。

土 器（写真14～17） 縄文時代中期全般にわたる多量の土器が出土した。その他、少量の後期初頭の土器片と平安時代の須恵器片1点がある。全体的に中期前葉～中葉の土器が多く、後葉の土器は少ない。また、北半から中央部にかけてのトレンチは中期前葉～中葉、南側（1～11T付近）では後葉の土器を主体とする傾向が窺われる。中期前葉の土器には、北陸地方の系統の新保・新崎式、東北地方南部の大木7b式のほか、関東地方の勝坂式などがみられる。続く中期中葉の土器は、在地で発達した火塙型・王冠型土器の類を主とする。新旧のタイプが認められ、初期の様相をとどめる特徴的な個体（写真15）もある。その他、東北地方南部の大木8a・8b式、北陸地方の上山田・天神山式、中部高地の焼町式など様々な系統の土器が認められる。中期後葉の土器には、東北地方南部の大木9～10式及びその変容種や陸帯文の土器などが散見される。なお、後期初頭の土器としては、三十船場式古段階に位置づけられる貼瘤文の土器片や条線文等を施した粗製深鉢の破片が3・4T周辺から、また須恵器片は7Tから出土した。

石 器・石 製 品（写真18～20） 器種別では、石鐵4・石槍1・打製石斧48・磨製石斧22・搔器3・板状石器1・磨石類（磨石・敲石・圓石）104・石皿12・砥石12・石核3・石棒2点を数える。磨石類以外では打製石斧の組成率が最も高く、当地域にみられる中期遺跡の一般的な傾向を示している。石鐵は圓基無葉の形態を主とする。石槍は長さ16cmの大形で加工途中の未製品。打製石斧には撥形と短冊形があり、粘板岩や頁岩を用いている。磨製石斧は定角式の大形品と小形品で、姫川流域産とみられる蛇紋岩製もみられる。磨石類では2個1対のくぼみをもつ四石が多い。また、石製品の石棒は大形品の欠損部分である。

土 製 品（写真21） 土偶8・三角形土版11・土製耳飾2・土製円盤9点がある。特に三角形土版が多いことが特色で、近藤家収集資料やこれまでの調査資料をあわせると40点を超える。土偶は頭部1・胴部1・胸部5・胴～脚部1点があり、いずれも中期に特徴的な「河童形土偶」の類とみられる。三角形土版には完形品が多く、刺突文や沈線文などを施す。土製耳飾は滑車形で大形品と小形品（朱彩？）がある。土製円盤は土器破片を円盤状に打ち欠いたものである。

表2. 出土遺物一覧（中期土器の相対量は、◎：多量→○→△：少量を示す）

トレン チ 名	土 器		中期土器の相対量			石 器・石製品 土製品	(計)
	点数	重量(g)	前 葉	中 葉	後 葉		
1 T	20	175		○			
2 T	42	360		△	○		
3 T	219	3500		○		打製石斧1	1
4 T	203	3250	△		○	石皿2	2
5 T	8	110			?		
6 T	43	810		○		打製石斧1, 磨製石斧1	2
7 T	311	3355		△	○	打製石斧2	2
						土製円盤1	1
8 T	87	1110	△	○	△		
9 T	28	410			?		
10 T	94	1415		△	○	磨石類1	1
11 T	460	9485	△	△	○	砥石1	1
12 T	1047	16845	△	○	△	石鐵2, 打製石斧2, 搗器1, 板状石器1, 磨石類4, 砥石1	11
13 T	378	5910	△	○		石鐵1, 磨石類2	3
14 T	374	4850		○	△	打製石斧5, 磨製石斧1, 磨石類1	7
15 T	1268	16295	○	◎		打製石斧1, 磨製石斧2, 磨石類4	7
16 T	11	135		?		土製円盤1	1
17 T	73	690		○	?	磨石類1	1
18 T	5812	68597	○	◎		打製石斧3, 磨製石斧1, 磨石類10, 石皿1, 砥石2, 石棒1 土偶3, 三角形土版2, 土製円盤2	18
19 T	169	2180	△	○		打製石斧3, 磨製石斧1, 磨石類7, 石核1	12
20 T	27	480		△			
21 T	1366	19760	○	◎	△	右鐵1, 打製石斧6, 磨製石斧1, 磨石類6 三角形土版1	14
22 T	1	5		?			
23 A T	845	11805	△	○		磨製石斧2, 磨石類2	4
23 B T	427	8890	△	○		磨石類2	2
24 T	4148	73835	○	◎	△	打製石斧5, 磨製石斧1, 搗器1, 磨石類10, 石皿1 土偶1, 三角形土版2, 土製耳飾1, 土製円盤1	18
25 T	13	170		△		打製石斧2, 石皿1	3
26 T	25	440		△		磨石類1	1
27 T	7568	158075	○	◎		打製石斧6, 磨製石斧6, 磨石類25, 石皿2, 砥石3 土偶1, 三角形土版1, 土製耳飾1, 土製円盤2	42
28 T	8	120		?			
29 T	1497	24755	○	◎		石輪1, 打製石斧6, 磨製石斧3, 磨石類8, 石皿3, 砥石3, 石核2 三角形土版3, 土製円盤2	26
30 T	4	50		△			
31 T	185	2225	△	△		磨製石斧1, 磨石類4	5
32 T	1692	30065	◎	○		打製石斧1, 磨製石斧1, 搗器1, 磨石類7, 石皿1, 砥石1 三角形土版2	12
33 T	15	140		△			
34 T	2072	35080	○	◎		打製石斧4, 磨製石斧1, 磨石類8, 石皿1, 砥石1, 石棒1 土偶3	16
35 T	112	1310		△		磨石類1	1
表採	45	390					
總計	30697	507077	○	◎	△	石鐵4, 石輪1, 打製石斧48, 磨製石斧22, 搗器3, 板状石器1, 磨石類104, 石皿12, 砥石12, 石核3, 石棒2 土偶8, 三角形土版11, 土製耳飾2, 土製円盤9	212
							30



写真14. 繩文土器① (中期前葉～中葉)



写真15. 繩文土器② (中期中葉)



写真16. 繩文土器③ (中期中葉)



写真17. 繩文土器④ (中期後葉～後期初頭)



写真18. 石器・石製品① (石鉈・石槍・磨製石斧)



写真19. 石器・石製品② (打製石斧)



写真20. 石器・石製品③ (閃石・石皿・砥石・石棒)



写真21. 土製品 (土偶・三角形土版・土製耳飾)

IV まとめ

今回の調査では、史跡指定範囲内を対象に35か所のトレンチを設定して試掘を行い、堆積土層、遺構の有無、遺物の出土状況などを確認した。土層の堆積は遺跡中央部及び東端部では比較的良好であるが、その他は概して浅い状況であった。遺構としては竪穴住居跡・炉跡・焼土・土坑・ピット・埋設土器などを確認した。また、縄文時代中期全般の土器を中心石器・石製品・土製品など多数の遺物が出土した。

堆積土層が全般的に浅い状況は、長年にわたる畑地の耕作や土地改良等で土壤が移動・流出したことによるものであろう。また、近藤家も収集資料の膨大な量からみて相当の地点を発掘したとみられ、今回の出土状況に影響を及ぼしている可能性が考えられる。実際、近藤家が発見した「火焔土器」(重要文化財)出土地点の南側にトレンチ(17T)を設定してみたが、土器の絆片が出土したのみで、土層中に近代陶磁器片が混在するなど擾乱の痕跡が認められた。18Tや23ATにも同様の痕跡が確認され、その出土状況については慎重に検討する必要があろう。

遺構や遺物の分布やその濃密からみると、指定地内の南東域に小規模な馬蹄形状、また北東域に大規模な馬蹄形状の広がりが推測される(図5)。その出土遺物には時期差があり、前者は中期前葉～中葉、後者は中期後葉を主体とする傾向を看取できる。遺跡の広がりについては、昭和47年のボーリング棒による炉跡検索調査の報告[中村1973]があり、2群が連結した馬蹄形状に展開する状況が想定されていた[小熊1991]。今回の結果はその広がりにほぼ近い様相を示している。ただし、昭和47年の調査では106基の「配石炉址」(石組炉)が推測されていたのであるが、今回の試掘した範囲内では石組炉の位置は合致せず、また地床炉の比率がかなり高いことが明らかになっている。なお、当地域の大規模集落跡の構成を考える場合、土器捨て場の有無や位置が重要な問題となるため、今回の調査でも指定地南側で東西に延びる小規模な沢の周辺や「遠藤沢」に面した西端部に注意を払っていたが、明らかにできなかった。

今後の調査では、①さらに東西・南北を縱断するような試掘溝を設定し、集落の全体的な構造、広場・居住域・墓域などの位置や規模を明らかにすること、②遺構が集中する箇所については発掘範囲を広げて、典型的な住居跡を検出すること、③土器捨て場の有無や位置を確認するため、遠藤沢沿いの精査を進めるここと、④当時の自然環境を明らかにするため、土壤の花粉分析などの自然科学的な検討を行うことなどが課題となる。また、隣接する三十稻場遺跡でも今回と同様の試掘調査が必要であろう。

今回の調査にあたり、文化庁・新潟県教育委員会・地元の馬高遺跡保存会をはじめ、多くの方々や機関から御指導や御協力をいただきました。心より厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献 中村孝三郎 1958 「馬高 No.1」 長岡市立科学博物館

中村孝三郎 1973 「馬高・三十稻場遺跡緊急調査報告書」 長岡市教育委員会

小熊博史 1991 「馬高遺跡ースペースネオトピア開通道路に伴う確認調査報告書」 長岡市教育委員会

駒形敏朗 1999 「史跡「馬高・三十稻場遺跡」隣接地一環整備事業に伴う発掘調査」 長岡市教育委員会



図5. 集落展開の推定図(遺構・遺物の集中域)

報告書抄録

ふりがな	うまたかいせき
書名	馬高遺跡
副書名	—史跡「馬高・三十稻場遺跡」環境整備事業に伴う試掘調査概報—
巻次数	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	小熊博史
調査機関	長岡市教育委員会(科学博物館)
所在地	〒940 0072 新潟県長岡市柳原町2番地1
発行年月日	2000年3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
馬高遺跡	新潟県長岡市 柳原町1丁目 字中原2995他	15202	18	37° 26' 35"	138° 46' 22"	19990924 ~1112	1,400	史跡の環 境整備事 業に伴う 試掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬高遺跡	遺物包含地 (集落跡)	縄文時代 中期	堅穴住居跡(推定)5棟 炉跡 焼土 埋設土器		縄文土器 30,697点 石器・石製品 212点 土製品 30点		大規模な環状集落 火焔型土器の出土	

※表紙写真：13T堅穴住居床面出土の火焔型土器（部分）

馬高遺跡－史跡「馬高・三十稻場遺跡」環境整備事業に伴う試掘調査概報－

平成12年3月30日印刷・発行

発行：長岡市教育委員会（科学博物館：新潟県長岡市柳原町2番地1）

印刷：吉原印刷株式会社（新潟県長岡市南陽2丁目949-13）